

兵庫県南部地震発生から 10 年間の
被災者の生活と心の復興過程に関する考察
—市民の防災力向上に向けて その 1—

正会員 ○ 中村 文香*1
正会員 石川 孝重*2
正会員 野田千津子*3

兵庫県南部地震 被災者 復興
生活 減災 防災

§ 1 はじめに

巨大な地震は物的・人的に様々な被害を生み、被災者は一時的に非日常の状態に陥る。復興の過程は様々であるが、多様な事象が被災者の生活と心に影響を及ぼす。このような被害をできる限り小さくするためにも、市民一人一人の防災力を向上させることが重要である。

被害の程度や被災者の個性によって、地震災害が生活や心に及ぼす影響は異なると予測できるが、時間の経過も被災者の生活と心に影響を及ぼす一要素である。本報では、兵庫県南部地震から 10 年の経過をふまえて、周辺社会との関わりの中で、被災者の生活と心に影響を及ぼす要因を抽出し、復興を手助けする要素を見出す。

§ 2 被災者の生活と心に影響を及ぼす要因

震災後 10 年間の被災者の体験手記集^{1)~10)}の事例から被災者の生活と心に影響を及ぼした要因を抽出した全 354 事例を、文献¹¹⁾等から調査した周辺社会の出来事と対応させ考察した。

表 1 は被災者の生活と心に影響を及ぼした要因を抽出した事例の一部である。地震直後と復興過程に発生する要因は影響の仕方が異なる。また、被災者の復興には生活と心の二つの側面があると考えられるため、要因と影響を二つに分け、それぞれを分類して抽出する。

事例 115 では、生活復興の進展状況の違いが心に影響を及ぼしている。48 歳の女性は自宅が全壊し、経済的な不安を抱える。自宅の再建問題が進展しない一方、周囲の話題は家族のことや旅行のことなどが中心になり、震

災について触れることが少なくなる。顕著に現れる生活復興の状況の違いは、生活の復興が遅れる被災者に自分を取り残されていると感じさせる。

事例 218, 219 では、被災者の生活や街並みの復興が心に影響を及ぼしている。39 歳の男性自身の生活は、被災以前の状況にある程度まで戻ったが、街の目に見える部分の復興と共に被災地における震災の記憶が少しずつ薄れていると感じ、震災直後に被災地に存在した人の温かさや、連帯感の記憶にとらわれ、自分の心は復興から取り残されていると感じている。この事例では生活の回復と同時に心が回復しておらず、心に抱える不安が病気という形で表面化する。一方、震災後始めた趣味が心を整理するきっかけとなっており、震災の記憶と向き合うきっかけや方法をもつことで、心の復興に繋がる場合があることがわかる。

§ 3 要因の時期による変化

全事例についてこのように分析した結果、被災者の生活と心に影響を及ぼす要因を抽出した。図 1 に被災者の復興を主に手助けした要因と被災者の復興を主に妨げた要因を区別して示す。例えば建物の再建に関連した要因としては、都市計画や経済的な問題、建物の再建の進展状況等が影響する。生活の安定に住宅の果たす役割が大きく、生活の安定が心にも大きく影響を及ぼす。

生活にかかわる状況には個人差があり、地域の出来事と密接に関連している。心にかかわる状況は人によって現れる時期や内容に違いがある。全事例を分析した結果、

表 1 被災者の手記に基づいた事例 (抜粋)

事例番号	時期	要因		属性	影響		出典	共通要因
		地震による被害	地震後に起こった出来事		心に関する影響	生活に関する影響		
115	1996年 8月	自宅は全壊	自宅マンションの再建問題はなかなか進まない 友人が集まって話をする機会があっても話題は家族のことや海外旅行のことなどが中心	48歳女性 娘と二人暮らし、娘は高校生でこれから大学に行かせなければならない	今の自分のつらさの何がわかってそんなことが言えるのかと腹立たしく悲しくなる。	震災直後のほうがわけもわからずかえって明るくいられた。	文献 3 「再建」	人に関する事
218	2000年	(特に大きな物的、人的被害はなかった)	友人知人親戚家族に恵まれても幅広くこなすよ 趣味やスポーツ「帯状疱疹」と診断された	39歳男性 会社員	昨年(一九九九年)僕は、「心の復興は、しない」と、手記に書いた。つい最近、それが体の異常に及んだ。病の苦しみを知らずにつれ、まだまだ安全圏にいる自分が「心の復興」の本当の意味を取り違えていた気がして、恥ずかしくなった。	「帯状疱疹」は、震災後しばらく、震災ストレスによる病としてマスクなどで取り上げられたことがあったと思う。我々の住む被災地には、この病で苦しんだ人が大勢いるはずだ。発症して分かったが、安静にしなければならぬこと、治療費が風邪などに比べかなり高額なことの二点が、忙しい身にさらに大きなストレスとなつてのしかかってくる。生活がどうにも立ち行かなくなり心に大きな備を持ったがために発症してしまった人にとって、追い討ちをかけられるような病気だ。病気になるって初めて「心の復興」にまだまだ遠い人のことがほんの少し分かった。	文献 6 「三線」	昇華
219					「三線」も、大きな癒しとなった。音楽を通じ人と出会うたび、自分がどんどん前向きになっていくのが分かった。音楽は聴くだけではなく、楽器を弾くなど自分が主体的に関わっていくことでさらに心を癒す効果があるようだ。	最初は自分で適当に弾いていたが、類は友を呼ぶのか、楽器の世界とはこういうものなのか、不思議と同好の人と多く出会うようになっていった。		昇華

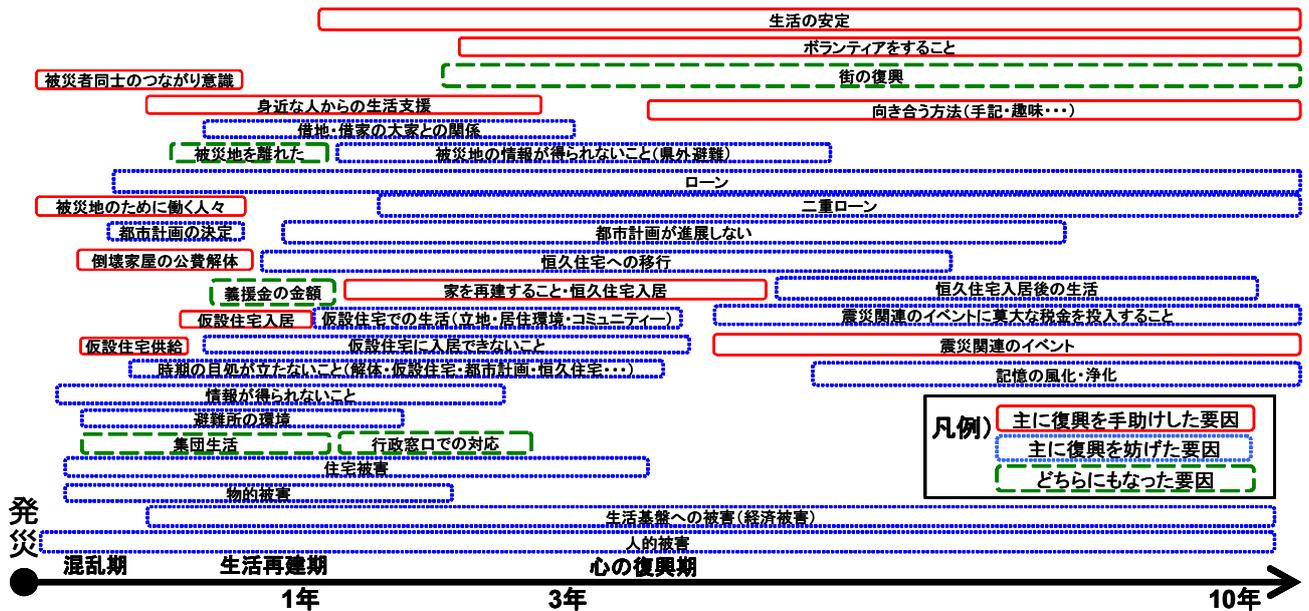


図1 被災者の生活と心に影響を及ぼす要因

被災者の復興過程を混乱期・生活再建期・心の復興期と3つの時期に分類することができる。

1995年1月17日～1995年3月頃の混乱期は、地域全体が震災以前の暮らしに戻りたいと要求する時期である。地域全体が被災しているため、個別に要求は抱えつつも表面化しにくい。次の1995年4月～1997年頃の生活再建期は、生活の復興を求める時期である。生活の復興状況は人により違いがあり、生活に対する不満やそれに付随する不安が現れる。1998年頃からの心の復興期は、震災を体験してきたことによる不安を何らかのかたちで乗り越えたいと望む時期である。生活が安定することで心の状態に目が向き始める事例が多い。

§4 被災者の復興過程と影響要因

このような復興過程をふまえ、被災者の復興に影響を及ぼす要因を考察する。時期に関係なく、地震被害の程度は復興過程に及ぼす影響が大きい。人的被害という失ったものが取り戻せない場合、心に受ける影響は大きく、生活より心に目が向く場合が多い。一方、生活基盤を失うほど経済的に大きな被害を受けた場合、まず生活に目が向く場合が多い。さらに経済的な不安が心に及ぼす影響も大きく、生活が復興して初めて心の状態に目を向ける人が多くなるという特徴がある。

生活再建期には生活と経済的な被害の程度が復興に大きく影響する。行政の政策の関与も大きい。時期に関する情報が得られないと、被災者は次の生活への移行に目処が立てられず、不安を抱えやすい。情報開示の時期や方法が重要である。また被災者は個別対応を求めるが、行政の対応には平等性が第一に求められるため、被災者の要求との間に溝が生じる場合が多く、行政の対応への不満や復興から取り残されるという不安を抱えやすい。

心の復興期には、生活が復興したことにより震災の記

憶に目が向く。混乱期に存在した周辺社会のつながり意識が薄れることが影響する場合もある。被災経験を整理すること、立ち止まって考えることは被災者にとって重要であり、震災の体験と向き合う方法を得られることは昇華へ向けた重要な要素となる。

§5 おわりに

兵庫県南部地震発生から10年間にわたる被災者の復興過程は3つの時期に分けられる。地震被害の程度による影響は大きい。時期により生活と心に影響を及ぼす要素は異なる。住まいや生活基盤、周辺社会の復興とともに生活の復興が進む一方で、心の復興は個人差が大きく、生活の復興と同時に進むわけではない。周辺社会がこのことを理解し、個々の状況に配慮できる可能性をもつことは、被災者の復興を手助けする重要な要素となる。

【引用文献】

- 1) 阪神大震災を記録し続ける会：被災した私たちの記録，朝日ソノラマ刊，1995年5月30日。
- 2) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 - もう1年，まだ1年，神戸新聞総合出版センター，1996年4月1日。
- 3) 阪神大震災を記録し続ける会：まだ遠い春，阪神大震災3年目の報告，神戸新聞総合出版センター，1997年6月15日。
- 4) 阪神大震災を記録し続ける会：今，まだ，やっと・・・阪神大震災それぞれの4年目，神戸新聞総合出版センター，1998年6月15日。
- 5) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 私たちが語る5年目，神戸新聞総合出版センター，1999年7月30日。
- 6) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 2000日の記録，神戸新聞総合出版センター，2000年8月10日。
- 7) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 7年目の真実，JSP (PTE) LTD，2001年6月30日。
- 8) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 8年目 記憶の風化と浄化，JSP (PTE) LTD，2002年9月30日。
- 9) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災 記録と記憶，JSP (PTE) LTD，2003年9月30日。
- 10) 阪神大震災を記録し続ける会：阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ，神戸新聞総合出版センター，2005年1月17日。
- 11) 兵庫県・(財)21世紀ひょうご創造協会：阪神・淡路大震災復興誌，第1巻，1997年3月31日。

*1 松下電工 SFG 株式会社

*2 日本女子大学住居学科 教授・工学博士

*3 日本女子大学住居学科 学術研究員・修士 (家政学)

*1 Matsushita Electric Works SFG Ltd.

*2 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.

*3 Research Fellow, Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., M.H.E.